

「遊び雑感」その六

水はともだち

吉村 真理子

梅雨があけると待ち構えていたように太陽がじりじりと照りつけ、べっとり汗をかいた子どもたちは水辺に群がってくる。夏の遊びの主役は何といても水遊びに勝るものはない。庭に水道の蛇口があればそこからいくとおりの遊びが生まれる。

保育所では水道の蛇口に異常な興味を示すのは一歳児で、ちよつと目を離すとコックを開け、その下でうれしそうにバチャバチャと水をはねかえして全身びしょぬれになっている。「もうこれで三度目の着替えよ」と嘆く保育者を尻目に、着替えさせてもらおうとまたいそいそと水道のところへ

逆戻り。水の魅力は格別とみえ全く飽きる様子はない。

昔から、子どもの成長に必要なものは太陽と土と水だと言われてきたのは、他の植物や動物と同じように子どもも自然の一部ととらえていたからであろう。この三つが完備した環境とは、フレールベルが提唱したように自然豊かな庭園のイメージで、樹木と草花と芝生（草原）と駆け回れる土の広場や砂場、小さな池や小川があればいいことはない。子どもはそこから多くの発見、感動、喜びを貰いながら健康でよく動く身体と、たくさん友達を手に入れることができる。

そういう場所は現実には望めないにしても、そんな理想を描きながら子どもにとっての水遊びの意味をとらえ直してみてもいいだろうか。水遊びは単にプールで泳げるための前段階としてではなく、水と関わることによって何を感じ何を体験し

ているのか、子どもの遊びを通して考えてみたい。

感覚の喜び

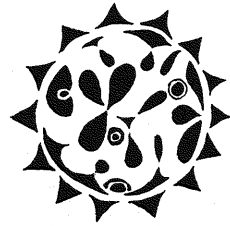
気温が高くなると水に触れたがるのは水が冷たく快く感じるからであろう。ほてった顔や手を水に浸すと体温が下がり生き返ったように涼しくなる。気持ちがいいから水の側を離れようとしなない。コックの調節で蛇口から流れる水が細くなったり太くなったり、勢いよく流し台から跳ね返ったりするのを手のひらで確かめながら実験してみる。ごく幼い子どもは蛇口から真つすぐ落ちてくる水の柱をつかまえようと何度も試みては失敗する。そのうち、飛び散る水の様子をおもしろがり蛇口に手を押し当てて四方に水を跳ね飛ばす。

絵の具や泥が手につくと手を洗いにいくのは、水がいろいろな汚れを洗い流す性質をもっている

ことを遊びながら知ったにちがいない。絵の具を溶いたカップを洗うために蛇口の下に置き、水が溢れてカップから緑色が流れ出して排水口に消えていくのを見ながら「あつ、緑が逃げていく」と叫んだMちゃんは、カップの中の緑色がどんどん流れ出し透明になっていくのを「逃げていく」と見たのであろう。おもしろい表現だと思う。

水に溶けるものと溶けないもの

水がいろいろなものを溶かすことに気づいた子どもがやり始めるのが色水遊びで、水に入れて揉み出すとどんな色になるかという実験が始まる。しぼんだ朝顔の花がらは「取ってもいいわよ」とお許しが出ているのでせっせと集めてくる。一番人気は赤と紫で、薄い青や白、薄茶色の花では鮮やかな色が出ないことにも気づいてくる。赤紫の汁は「ぶどうジュースみたい」「メロンジュース



も作ろう」と朝顔の葉を揉むとどろどろした濃い緑になり「青汁になった」とおもしろがっている。

そうなる下次に思いつくのはジュース屋さんで、メニューを増やすための工夫が始まる。レモンジュースを作ろうと黄色の花を探し歩いてカンナやまつばたんの花で試してみるがレモン色にはならず「どうしてかなあ」と首をかしげる。そこへだれかが足洗い場に溜まった泥水を汲んできて「コーヒーはいりませんか」と得意そうに言う。「ミルクは何でつくる?」「チヨークをけずってみようか」ところが、せっかくのいいアイディアもチヨークの粉は水の上に浮くだけで混ざらない。水に溶けないものもあることがわかったのも学習の一つである。

レモンジュースにこだわっていたA子が黄色の折り紙を探して来て水に入れると鮮やかな黄色がにじみだし「ほら、レモンジュースができたよ」とうっとり。「じゃ、メロンジュースだって」と黄緑の折り紙を絞り始める。「オレンジジュース

も」と色紙を使うことを覚えた子どもたちは俄然活気づいてきた。見ていた保育者たちは「これって安易すぎないかしら」「花以外のものを使うこと?」「そう、だって色紙だったらそのものずばりの色になるわけでしょ。工夫の余地が全然ないじゃない」「植物の他にも色がでるものを発見したと思えば?」「草木染めと化学染料の違いみたいなものね」「でもやっぱり自然のもので色水遊びをしてほしいわ」と、ちょっと複雑な気分になる。

色を出す実験はその後も続き、包装紙、つや紙、セロハン紙、金銀紙などは色水作りに向かな

いこともわかってきた。布切れや毛糸、果てはクレヨンまで試していたがほとんど色が出ないので再び興味は草花に戻っていた。やはり、この花からはどんな色が出るかなと期待をもって採み出すのが一番おもしろい遊びになるのだろう。

子どもたちは朝顔の花がらをぬらして紙に絵や文字が書けることも発見し、時にはハンカチやTシャツに被害がおよぶこともあり、あわてた保育者が染め物遊びを提案する。和紙の折り染めや古くなったTシャツを集めて絞り染めにしてファッションショーを開いたりする。折り染めや絞り染めのおもしろさは、乾かして広げたときにどんな図柄が現れるかという楽しみである。

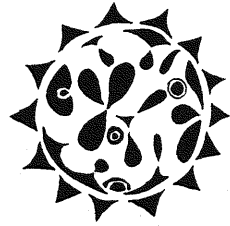
浮くものと沈むもの

チヨークの粉や削ったクレヨンが水に浮いたことから、次に興味をもったのは「浮くもの」と

「沈む」ものを前もって当てる遊びであった。水を張ったたらいに「積み木は?」「浮くと思うよ」「じゃ、この大きい積み木は?」「うーん、沈むかな」「あ、浮いた、こんなに大きいのに」などと子ども同士でクイズを出し合って楽しんでいゝる。プラスチックや金属のおもちゃや道具を片端から試すので材料にはこと欠かない。「運動靴は始めは浮いてるけど水が入ると沈んじゃった」と、とんでもない実験をする子もいる。

やがて、船づくりが始まり空き箱にマストや煙突をつけたもの、広告紙で折ったボートなどでビニールプールは大にぎわい。手で波を起こして進めようとみんなが四方八方から水をかきまわすので衝突、浸水、沈没してしまう船もあり、紙のボートは折り目が開いて一枚の紙になつて漂っている。

キャラメルの包み紙やクレヨンをぬつた紙で船



を折つて浮かべると水をはじいて沈まないことを伝えてやると、早速試して「本当だ、ぬれてないよ」と水から引き上げて底に触つてみる。これら

の遊びはいわゆる理科の実験のようなものだが子どもにとってはとても興味のある遊びのようだ。小・中学生の理科ばなれなどどうして起きるのか不思議なくらいである。

水を加えるとももの性質が変わる

雨が上ると庭にできる水たまりは格好の遊び場所になる。小さい子は長靴でバシャバシャ足踏みするのがうれしくてたまらない。はだしになつてぬめつとした泥の感触を楽しむ子もいる。大きい子は水たまりと水たまりを運河で結んで水を通

したり、ブランコの下にできた水たまりから排水口へと川を掘り、せつせと水捌け工事にいそしんでいる。だんだん深く掘り進まないとい水が流れないことも体験する。そのうち、川の両側にべとべとの土を固めて土手のように盛り、護岸工事に発展していく。土木工事は雨上がりの最大の楽しみとなる。

水がすっかり引いてしまうと土手の泥でおだんごづくりが始まる。丸めやすい堅さになるよう土と水の交ぜ具合を調節し、乾いた土と砂をまぶして磨きあげ、ピカピカのおだんごになるよう根気よく取り組む。おそらく全国の子どもたちが泥だんごづくりに情熱をもやすのは余程魅力があるにちがいない。

砂場にも水はつきもので、形抜きプリンやケーキづくりから、池、川、トンネル、ダム工事まで水を抜きにしては考えられない。

料理するとは水と火を用いること

もうひとつの楽しみは食べ物づくりである。泥団子をつくる時のように、小麦粉、白玉粉などの澱粉に水を加え加熱すると、パン、クッキー、ホットケーキ、うどん、お好み焼き、お月見団子などがつくれることも体験させてやりたい（近ごろでは衛生指導の観点から食べ物づくりを禁止されることもあると聞かすが、加熱すればさほど問題は無いのではと残念な気もする）。

クッキーの粉を練りながら「耳たぶつてこのくらい堅さ?」「べとべとして手にくつついちゃうよ」「お粉をまぶしたら大丈夫」「ホットケーキはポタポタと落ちるくらいがいいんだよ」などと水の量を加減することも覚える。うどんやお団子は茹でる、蒸す。パンやクッキーは焼くという調理の違いもつくつてみればよくわかる。食べ物つ

くりの工程に自分が関わりながら目の前で出来上がりを待つのはわくわくする楽しみだ。パンやクッキーの焼ける匂い、ご飯が炊けた匂い、うどんのスープの匂いが食欲を刺激する。こんなに感覚を鋭敏に働かせ気持ちは動かせる教材は他には見られないのではないか。

水はどこから

水道のコックをひねれば水が出る便利な生活に慣れている子どもに、生活に欠かすことのできない水のもととは雨であり、川や池をつくり、やがて海に流れ入り、海水が蒸発して雲になり雨を降らせるという循環も年長児には知らせてやりたいと思う。幸い、子どもが興味をもちそうな絵本が幾つも出版されているので探してみようか。一例をあげると、『かわ』（加古里子、文・絵 福音館書店）には川の誕生から海までの川の一生を周

辺の様子を含めて描かれている。子どもたちは高い山の雪が解けて川になりダムや発電所、送電線の鉄塔がたっているのを見て、電気も水からつくることを知って驚く。

私たちが喉が乾いたら水を飲みたくなるように、雨が樹木や草花を育て、お米や野菜、果物を実らせ、身近な鳥や昆虫、魚なども水がなければ生きられないことをそれとなく伝えておくことも、地球環境を守るために必要なことではなからうか。

（元松山東雲短期大学）

☆この連載は今回で終了します。